

あ る 男 の 臨 終

短編

山中與隆

YAMAMAKA TOMOTAKA

Duo-Yamanka

ある男の臨終

山中與隆

目次

ある男の臨終

1

編者あとがき

56

ある男の臨終

作 山中與隆

厚い雲は低く垂れ込め、真昼だといふのに薄暗い。風はほとんどなく、時々細い枝の葉がかすかに揺れる以外、男が眺めている景色の中には、色も音も動きもない。この景色は、いまの自分の状況をそのまま

ま反映していると男はぼんやり感じていた。男は、もう一時間以上じつと座ったまままでこの景色を眺めていた。見上げると一段と黒味の濃い雲の塊がゆつくりと流れていく。そして一陣の風が起こって木々を揺らしてからふたたび静寂に戻った。しかし、男はその一陣の風に呼び覚まされたように三年前に地上で起こったことを考え始めていた。

男は、あのことが起きるまではある大手建設会社の中堅の技師として、ごくありふれたサラリーマンの忙しい毎日を送っていた。家庭も、中学生と小学生の子供二人と妻の四人暮らしで、特に変わったところもない平凡な暮らしであった。今考えると、そんな暮らしの中にも、さわやかなそよ風はよく吹き抜けていた、と男は思い出している。子供たちは素直で、学校の成績は可もなく不可もなしといった具

合であつた。子供たちは子供たちで、学校生活や家族でたまに出かけるアウトドアライフを無邪気にエンジョイしているようであつた。夫婦の間にも波風といったものは何もなかつた。会社での男の仕事は、大きな橋梁や高架橋の設計が主で、技術や経験、知識を動員して仕上げていく仕事にはそれなりのやりがいを感じていた。チームでする仕事だから、何々橋を私が作ったなどといった華々しいことはないが、

それでも完成して供用され始めた橋などを見ると、やはり達成感や充足感に満たされるのであった。大きな仕事がおわった時など、自分が建設にかかわった橋を見るために、家族四人でドライブに出かけた。りしたことも何度かある。橋全体がよく見渡せる場所をあらかじめ見つけておいて、そこに車を止めて一家は長い時間橋を眺めるのだった。そんな時、男は妻子にその橋のことや、設計や建設途中の苦労話

などを話して聞かせることはしなかつた。家族は、ただ無言で橋を眺めている父親の表情に、言葉をかけることも、何か説明じみたことを求めることも出来ないような深い感慨を読み取っていたのである。無数の苦勞のすえ完成した橋であることは、設計から完成までの数年間の父親の姿から、家族は十分に知っていたのである。設計を担当した建造物が完成して、無事施主に引渡しが終わるまでは、何らかのか

かわりは続くものだが、現場の工事にかかわる部署と違って、設計図を工事部門に引き継ぐと、設計部では次の物件の設計が始まる。だから、男が家族を連れて橋を見に来ているところは、すでに次の仕事にかかわっているのである。

そのような家族とのあるドライブのとき、男が取り組んでいたのは、市内中心部から郊外の新しい開

発地に伸びる都市高速道路の高架橋の設計であつた。一つの仕事が進み時期を迎えた時の殺人的な忙しさに比べると、新しい仕事の始まりの時期は静かでスムーズである。デザイナーの夢に満ちたアイデアを現実の構造物にするための計算や議論や知恵の出し合いは、楽しい期間である。それが少しずつ現実の形にまとまっていくなしたがつて、予算の問題やデザイナーとのやり取りが緊迫度を増し、さらに

時間との競争が加わって、知らず知らずのうちに家に帰るのもままならないような状態に入り込んでいくのである。それでも、新しいものの建設には夢や希望といったものが常に備わっているものである。

このようにして、プロジェクトは進み五年間の計画、設計の期間を終えて、建設が始まっていた。第二次大戦後の都市計画が整然と行われていたこともあって、市中心部の難工事が予想された地下部分も順調

に進んでいた。郊外に延びる高架橋の橋脚が立ち並び誰の目にも建設の姿が一目瞭然となっていた。出来上がった橋脚に橋桁を渡す工事の一部が始まっていた。設計が工事部の手に渡り、工事が順調であれば男の部署としては、とりあえず一安心できる時期である。男は休日返上の日々が続いたこともあって、久しぶりの休暇をとった。子供の夏休みも重なって、なんとなくゆったりした時期であった。休暇

といつても、旅行するわけでもなく家でぶらぶらしながら、近所のスーパーに家族と車で買出しに出かける程度のものであった。休暇があと三日となったある午後、妻が子供二人をプールに連れて行くために出かけた。男はクーラーをかけてCDを聞きながら昼寝を決め込んだ。幸福とはこのことかと思うような時間である。

音楽が終わった気配で、男は目が覚めた。時計に目

をやった男は、そろそろ子供たちがプールを終えるころかなと思った。何気なくテレビのスイッチを入れた。興奮したアナウンサーの声と、ぼんやりした画面でテレビは立ち上がった。何か事件があつたらしい。今度はどこなんだろうと、男はさして関心もないまま見始めたが、すぐに見覚えのある景色に気づいた。崩れたコンクリートの構造物が写っている。下敷きになった何台もの車、救急車それらが矢継ぎ

早に次々と画面に現れている。

「俺の現場だ・・・」

男は直感したが、何が起こっているのかは理解できなかった。電話が鳴った。会社からで、

「××さんですね。××工区の現場で大きなトラブルがありました。大至急出社してください」
電話の声はひどく緊迫していて、震えているようで

もあつた。男はもう一度テレビの画面を、今度は注意深く見た。しかし、画面はけが人が運び込まれた病院の正面玄関を写している。男は大急ぎで着替えをして、しばらくしたら帰ってくるはずの妻に当てて簡単なメモを書いて食堂の机の上に飛ばないようにな自分が飲みかけのコップで押さえをすると、テレビを消し、車の鍵をいつも置いてあるテレビの下から取ろうとして、妻が乗って行って今車がないこと

にはじめて気が付いた。

すぐにタクシーを呼んで、会社に駆けつけた。会社の前はすでに無数の車でごった返していた。男は会社からずいぶん離れたところでタクシーを降りて、事務所に走った。何か大変なことが起きていることはわかってはいたが、いったい何が起こって、いまどういう状況なのかについては、さつき見たテレビの

画面から得た断片的な情報だけが頭の中を駆け巡っているだけであつた。ある意味では、このときすでに状況を知つて動いている他の人たちに比べると、男の意識ははるかにのんびりしたものであつたといえる。会社の玄関を駆け込む男がその会社のマークの付いた作業服を着ているのを見つけた新聞記者が駆け寄つて男の腕をつかんで何か聞こうとした。男は振り返つたが、思いなおして記者の腕を振り払つ

て自分のデスクがある二階に駆け上がった。二回の
広いフロアには同僚や上司その他が右往左往してい
た。思えば当然のこと、たまたま休暇をとってい
た男以外は普通に仕事をしていた平日の午後だった
のである。男が部屋に入ると、すぐに直属の上司に
呼ばれた。上司の顔はべったりと汗で濡れており、
更なる汗が流れ出している。それだけでなくひどく
汚れていて、汗が黒ずんだ流れとなつて頬や首筋を

伝っている。男は、上司が現場から帰ってきたことを察した。

「休暇中すまない」

上司は、状況に似合わない言葉を男にかけてから、起きたことをかいつまんで男に説明した。そして報道関係者に、事故に関するいかなる個人的意見や感想も言わないよう強く指示した。事故は設計にも関係しているかもしれないので、とりあえずここに待

機するよう男に命じた。

事故は、建設中の橋脚が橋桁を載せた時に、重さに耐えられないかのように崩れて、落下した橋桁は、下の道路で信号待ちしていた車を何台も押しつぶし、多数の死傷者が出たというものであった。その橋脚そのものは出来てからすでに一年以上たっており、問題なく出来上がっていることは確認されている。それに阪神地震以上の地震にも十分耐えるように設

計したはずである。その橋脚の上に、橋桁一つが載ったからといって、重さで崩れるなどということはありません。男は上司の説明したことが理解できなかった。男は、広いフロアの端の方につけっぱなしになっているテレビに近づいた。画面は事故現場を映し出している。確かにコンクリート製の橋桁一本が数台の乗用車の屋根をまともに押しつぶす形で落ちていている様子が、少しはなれた場所から電柱の隙間

からのぞくようにして撮影されている。カメラは事故現場のすぐ近くには入れないようである。救急車の回転する赤色灯がやたらにはつきりと写っている。レスキュー隊が押しつぶされた車から負傷者を助け出しているのであるろうか。テレビ画面に見入っている男に、ともに設計を担当した同僚が近づいてきた。

「おれも現場見てないから何とも言えないんだけど、橋脚が崩れたって言うのは、どういうことなんだろ

う・・」

彼も男と同じことを考えているようである。テレビ画面は、会見場の場面が変わった。

「なんだ、ここの会議室じゃないか」

同僚が言った。映っているのは見慣れた一階の会議室で、壁際には社旗が立ててある。設計を担当した者といっても、自分のデスクのあるこの部屋に足止めされているので、いまのところテレビに映された

現場やこの会見でしか状況を知ることが出来ない。支社長、担当専務、工事部長らが折りたたみ机を前に並んでいる。

長さ五十メートルのコンクリート橋桁を、橋脚上の所定の位置にずらせる作業をしているときに、その橋桁が転がるような形で落下して、供用中の一般道路上に落下、その下で信号待ちをしていた乗用車、軽トラックなど七台を押しつぶした。押しつぶされ

た車は大破し、車に乗っていた人たちに多数のけが人が出ているが、その人数やけがの状況はまだ救出が続いている段階で、明らかになっていない。車に乗っていた人以外にも通行人などにけがをした人があるほか、工事関係者にも複数のけが人がいることを事務的に説明した。そして、原因は今のところ不明であるが、とんでもないことを起こしてしまったことをお詫びすると結んだ。会見は、まだ現場の収

拾も付いていない段階のものだけに、ごく簡単なものであった。

会見の内容だと、橋桁は落下したが橋脚は崩れていないと聞き取れた。それなら男にも少し状況が読めてきた。つまり、橋脚に固定しようとして移動していた橋桁が、何らかの理由で、下の側道に転落したと言うことなのだ。それだと、おそらく設計ミスではなく、施工上のミスの可能性が高い。男は、自

分の理解が正しいことを願った。が、すぐに自分の責任のことだけを考えたことを反省した。

会見が終わって五分もたたないとき、会見に顔を連ねていた専務が、上がってきてテレビの前の男に耳打ちした。

「ご家族が、この事故に巻き込まれたらしいので、すぐに××病院に行きなさい。会社のこととはみんな

がいるから気にしなくていい。××君に送らせるから」

男は今初めて、プールに行つた妻子が事故現場の、まさにあの地点を通ること気づいた。事故に巻き込まれたとしたら、車線の方角から考えてプールに行くときである。そうだとしたら、家を出て三十分もしないうちにあのあたりを通つたはずである。で

は、妻と二人の子供はプールに行きつくこともないまま、病院に担ぎ込まれたのだらうか。それは自分が音楽を聞きながら昼寝していたときである。そもそも生きているのだらうか。そういえば、専務はひどく声を殺して耳打ちした。男はまとまりなく思い巡らせながら、同僚の運転する車に揺られた。目指す病院は、事故現場とは無関係な方角だったので、街は何事もなかったように、普段どおりの車の流れ

であつた。しかし、救急車のサイレンの音は聞こえており、それは病院が近づくにしたがつていくつも重なるように大きくなり、病院に着くと男の会社の前と同様にごつた返していた。ここでも病院の玄関よりかなり手前で車を降りた男は、送ってくれた同僚に早口で礼を言つてから、走るようにして病院の中に入った。そこは、玄関の外よりもさらに生々しくごつた返していた。白衣の人たちが走り回り、新

たに運び込まれたけが人が真つ白い布に包まれるようにしてベッドで処置室に運ばれていく。そのベッドからはぼたぼたと血が落ちていく。それが家族のことと重なって男は頬に鳥肌が立つのを覚えた。男は受付を探した。

受付には何人ものけが人の家族らしい人たちが詰め掛けている。受け付けているのは女子事務員ではなく、いつもは事務所の中にいるような男性二、三

人が当たっていた。何か大声でわめいている家族らしい人もいる。男は、それらの人たちの後ろについて順番を待った。前の数人が一度に抜けたので待つほどもなく男の番が来た。受付では、男が家族の名前を言ってもわからない。男は母親と二人の子供だと説明した。それを聞いてわかったように動いたのは、男に対応していた事務員の後ろにいた女子事務員だった。女子事務員は、

「こちらに」

と行ってカウンターから出てきて男を誘導した。人でごった返している長い廊下を歩いて幅の広い扉の前で女子事務員は止まった。男を振り返ると、

「お気の毒でした」

と行って、丁寧に頭を下げ、男の反応を見るまもなく扉を開けた。廊下の喧騒とは別に室内は静かだった。男は静か過ぎる空気に圧倒された。中の様子を

確認するのが怖かった。しかし、確認というほどもなく室内にキヤスターの付いた三つのベッドがあり、それらすべてに顔まですっぽりと白布のかかった遺体らしい形がみえた。女子事務員が一番端のベッドに近づきベッドに向かって一礼すると、さっと白布の顔の部分をめくった。何事もなかったような妻の寝顔があつた。しかし、すぐにその顔の異常な青白さに男の動悸が激しく打つた。さらに、額から目と

鼻の間をとおり、耳の下にかけて大きな紫色の傷が走っているのにも気が付いた。傷は何箇所か飛び飛びに縫った後があつた。眠っていると思つた目は二度と開かないように固く閉じられている。男は一步も動かず、一言も発せず、立ちつくしている。女子事務員は隣のベッドと、その隣のベッドの白布もめくつた。男の、二人の子供の目を固くつぶつた顔があつた。二人の顔は彼らの母親と同様に異常な青白

さをしていたが、傷のようなものは見えなかった。

女子事務員は、

「もうひと方、同じお車から救出された方がいらつしやいます。いま手術中ですが、ご確認いただけますか」

と、いって、一緒に来るように促した。男がついていくと、手術室に誰かわからないほど顔を損傷した男が、処置されている最中だった。男には、それが誰

なのが見当がつかなかった。男性は薄目を開けているように見えた。口をゆがめたように閉じている。顔から頭にかけてひどい損傷を受けている。

女子事務員は押し殺した声で男に話しかけた、

「ご家族でしよるか」

男は、感情が抜けてしまったように落ち着いていた。「さつきのは間違いなく妻と、二人の子供ですが、こちらは知らない人です」

と平静を装った調子で答えた。その声は声にならないほど低く、言葉の途中で息が足りなくなつて途切れ途切れになつた。それでも女子事務員は聞き返すこともなく頷いた。そして、男性のほうを手で示しながら、

「こちらと同じ車から救出されたとうかがっているのですが」

ともう一度男に尋ねた。男には心当たりはなかつた。

それは顔が崩れているためではなく、まったく見た
ことがない顔だと思った。

「まったく知らない方です」

そう答えるしかなかった。女子事務員はそれ以上追
及せず、男に先ほどの妻たちの安置されている部
屋に再び案内した。

男はあらためて家族三人の顔を見た。完全に思考
停止状態のように、そのままの姿勢で立っていた。

家族の方を見ているが、何となくぼんやりと見ているといった状態であつた。時間が止まっているように感じた。先ほどの女子事務員の声に気づいて振り返ると、男性事務員と若い警察官が女子事務員と一緒に立っていた。警察官が男に、家族であることに間違いないか尋ね、同じ車に乗っていたという男性が知らない人物であることを、事務的に確認した。そのうえで、病院の男性事務員とともに、男に向か

つて丁重に頭を下げた。

警察は、こんなときに申し訳ないがと断りながら、死んだ家族の住所、指名、年齢、勤め先、学校などを聞いてから出て行つた。

扉一枚向こうの廊下では多くの人が行きかい、玄関に近い方角ではごった返しているというのに、男と命のなくなっている三人の家族とが残された部屋は冷たく静まり返っていた。長い時間誰も入ってこ

なかつた。男はおそるおそる家族に近づいた。妻の白布をめくつてみた。ミイラのように体中が包帯で巻かれている。肩から腕の辺りにポリウム感がない。男は瞬間的に、橋脚に半身を押しつぶされた妻の姿が目の前をよぎつた。

男は妻の顔に白布をかけると、壁際に一つ置いてあるパイプ椅子に腰を下ろした。悲惨な現実を目の前にしているのに、泣くという感覚がなかつた。ま

だ本当の理解にいたっていないのだ。ただぼんやりと、自分も一緒にプールに行けばよかったと繰り返して考えていた。そのとき男はさつき女子事務員が言った言葉を思い出した。たしか同じ車から救出された、と言っていた。さつき聞いたときには、あのどさくさでは、どの車に乗っていたケガ人であるかなどわかるものではないと思っていた。救急隊は一刻も早く病院に運ぶことだけを考えているはずだ。そ

のあたりにうずくまっているケガ人がいれば、すぐに救急車に収容するだろう。きつとたまたま自分の家族の近くにいたケガ人なのだろうと、深くも考えなかった。しかし、考えてみると『同じ車から』と言った。どういう意味だろうか。妻が誰かを便乗させていたのだろうか。懐疑的な考えが男の頭の中に広がりかけたが、それはすぐに霧のように消えていった。そのことを尋ねる家族はもういないのだ。男

は、体からどんどん力が抜けていくような気がして
いた。

どのようにして、親戚に知らせ、葬式の準備をし、
それを済ませたのか男ははつきりと覚えていなかった。
た。親戚はみな遠くに住んでいて、到着は翌日から
であった。知らせるまでもなく、テレビで犠牲者の
名前が出てからは、うるさいくらい電話がかかって

きたりもした。たしか、会社の同僚がずっと男について世話をしてくれていたことを何となく認識していた。男は朦朧とした気分の中で、外見上は気丈に振舞っていたのであった。

初七日が過ぎ、遅くまで残っていた親戚も引き上げて一人になったとき、男は家の中に自分以外誰も居ないことにあらためて気づいた。しかも、いつまで待っても誰も帰って来ないのだ。男は初めて泣い

た。声を上げて泣いた。何時間も泣いたような気がした。自分が少し落ち着いてきているのに気がついた。すると空腹を感じた。家の中には食べ物がたくさんあった。男は菓子や、にぎりめしや、ペットボトルのお茶や、組み合わせも考えずに口に入れた。そして、腹が落ち着くと、また悲しくなつて泣いた。

警察が、事故にあつた車を見に来て欲しいと言つ

て来た。警察署の裏の広い駐車場には原形をとどめないように潰れた車が、何台なのかわからない状態で置いてあった。男の車は、千二百CCの白いセダンである。男は見回したがそれらしい車は見当たらない。

「まだここに来ていない車もあるのですか」
男は、案内してきた警察官に聞いた。警察官は、別の警察官に確かめてから、

「あの現場で事故に会われた車は、すべてここに収容されておりませす」

と事務的に大きな声で男に言った。そう言われても、男の車は見当たらない。男はもう一度、今度は時間をかけて見たがやはり無い。警察官は、

「おかしいですね。よく見てください。損傷が激しいので、形はもちろん、色もわかりにくくなっているかも知れませんよ」

と言つて、男にもつとよく見るように促す。男は大破した車をひとつひとつ丁寧に見て歩いたが、やはり自分の車は見当たらなかつた。

「家内たちは、どの車から救出されたのですか」男は警察官に聞いた。死んでしまったのに救出もおかしいと思つたが、ほかの言い方が思いつかなかつた。警察官は、別の係官が持っていた書類を覗き込んで、

「一応記録では、これのようです」

と、いって、くろい四駆を指差した。タイヤは四本ともつぶれ、ほとんどペシヤンコ状態であつた。男は遺留品のようなものがないか潰れた車を覗き込んだ。潰された機械の隙間に青っぽい色が見えた。手を伸ばして引っ張ってみると浮き輪のようである。息子はイルカの絵がついた青い浮き輪を持っていたはずである。ということ、は、警察官がいうように、妻と

子供たちは、この見たこともない四駆に乗ってプールに向かっていたのだらうか。男には何のことか想像がつかない。

「じつは、心当たりがないとおっしやっていた男性も、この車から救出されたことになっています。どなたかご存知の方ではないのですか。傷がひどくてわかりにくかったと思いますが、思い出していただけませんか」

男は意識がもやもやして何処に居るのか、何をしているのかまったくわからなくなってきた。そして次の瞬間、あの見知らぬ男は自分であることに突然気がついた。男は家族四人でプールに出かけたのだ。自分の車で出かけたが、途中行きつけの車屋で、ちよつとした修理を頼み、代車として黒い四駆を借りてプールに向かったのだ。

では、家で昼寝をし、テレビで事故を知り、会社に駆けつけたり、病院で家族の遺体を確認したり、警察で車をしらべたりしたのは誰なのだ。葬式は本当にあつたのか。男はわけがわからなくなってきた。たしか、プールに一緒に行くかどうかでちよつとした言い合いがあつたが、結局一緒に行くことになつたのだつた。後ろの席ではしやぐ子供たちのやかましい声を聞きながら、家で昼寝がしたかつたと考

えた覚えがある。そして、少し回り道をして高架橋の現場を見ながら行くことにしたのだった。妻は反対したが、子供たちは見たいと言っていた。

しかしいま、映画が終わったようにすべての場面が真っ白くなって消えた。

男の臨終であつた。

完

*この物語はすべてフィクションであり、登場する人物その他はすべて架空のものです。

編者あとがき

著しくIT技術の発達した今日、かつて発表の機会に恵まれなかった無名アマチュア作家に大きなチャンスが到来しました。昨年末のAmazonのペーパーバック進出はさらに力強い追い風となっています。

故山中與隆は、定年後すぐに退職し、アマチュア

としてチェロを弾いて室内楽を好きにだけ楽しみな
がら第二の人生を過ごしておりましたが、それと同
時に、作家になることを目指して文筆を続けると宣
言し、毎年のように懸賞に応募していたようです。
それは近年まで続けられていたことがパソコンの中
身から分かりました。傍におります妻の私は、とう
に文筆を止めてしまっていると思っておりますの
で、それを知って愕然としました。

ここに、山中與隆が書き残しましたものを順次発表していこうと決心しました。なんらかのきっかけで本作品をお手にとって頂けたご縁を嬉しく思います。今後発表する作品にもご期待下さい。

またブログ ([URL:https://www.duoyamanka.com](https://www.duoyamanka.com))
への投稿の形でも発表していきたいと考えております

すので、あたたかく見守っていただければ幸いです。

二〇二二年四月

山中伶子

※1 山中與隆（やまなかともたか）の名前についで

與隆の「與」の字は「与」の旧漢字です。従って、入力時に「よ」で変換をかけると、下位ではありませんが、表示されません。

著者紹介

山中與隆（やまなかともたか）

一九三九年～二〇二一年

「名古屋生まれ、広島大学卒。小学校の教員暦七年、その後一般のサラリーマンを三〇数年。いまはリタイアして悠々自適の生活を享受中。大学時代に始め

た弦楽器（初めはヴィオラ、その後チェロ）を今も
続けている一方、小説や随筆の執筆にも力を入れた
いと思つています。

書くものとしては文学的なものから推理もの、歴
史もの、恋愛もの、ファンタジー、社会派的なもの
などジャンルを選びませんが、常にベースには何ら
かの形で音楽が絡んだものにしたたいと考えています。
ライフワークとしたい目標は、音楽を前面に出し

たもので読者の方々に小説としての読み応えと、そこに登場する音楽を是非聴きたいと思ってもらえるような、しかも私の著述によつてその物語にも音楽にも感動してもらえらるような作品を完成させたいと思つています。」

著者プロフィール(二〇一〇年五月)より

今後の出版予定作品

今後は、既刊の電子書籍のペーパーバック版を出版の予定です。

既刊作品

|| 電子書籍 ||

『都志見往来日記』 異聞

コンサートは開かれた

さまよえる視察団

蒸発の衝動

インテルメッツォ

爆発

妻が消えた

既刊の短編

アマールスを聞く男

オセロー

テンペスト

定年の晩

魂の三重奏

ロシアンルーレット

ささゆり

才能移転

ある三文作家が見たもの

けんか

袖ふれあうも

ミスターフエイト

峠を越えて嫁入りした女

花火見物

ある小学校教師の敗北

三坂峠 二話

第一話 《お蓮・勘兵衛 悲恋の墓》

第二話 《緑のトンネルで》

阿弥陀山

ゴーシユの華麗なる転身

ある男の臨終

野の寂しさ

四重奏

親も子も老いて

わしや、ただの山ザルじや

リヨウコからの電話

カルテットの風景

「オセロ」く手紙版

出来る間に、出来るだけ

なぜ？

紀行文

広島百山と吉和冠山登山

ひとり、山を歩く

短編シリーズ String Fiction Series

1 弦楽四重奏団 a

2 弦楽四重奏団 b

3 親和力

- 4 トリオ・ソナタ
- 5 不協和音
- 6 解散
- 7 音楽のある生活
- 8 ビオラを弾く生活
- 9 疑問
- 10 生きがい
- 11 激情

12 カルテット

最終三作品

裸の王様は何処へ行く

むかし俺がクマだったころ

ある兵士の物語

Ⅱ既刊のペーパーバックⅡ

『都志見往来日記』異聞

コンサートは開かれた

さまよえる視察団

短編集テンペスト他

短編集2―ある三文作家がみたもの他

短篇集3―ミスターフェイトほか

ある男の臨終

2022年9月10日初版発行

著者：山中與隆

編集：山中伶子

表紙素材元：

www.photo-ac.com

タイトル：高速道路高架の裏

作者：staylさん

写真のID：22562329

<https://video-ac.com>

タイトル 階段で空を見上げる男性

動画のID856

©Tomotaka Yamanaka 2022

<https://www.duoyamanka.com>
